

疾患理解を深める Personal Health Record

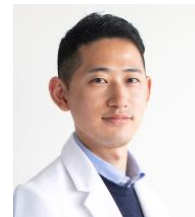
～眼科専門医が緑内障に取り組む

発表者：京都大学医学研究科 助教 沼尚吾

チームメンバー：

医療法人 創夢会 理事長 武蔵国弘

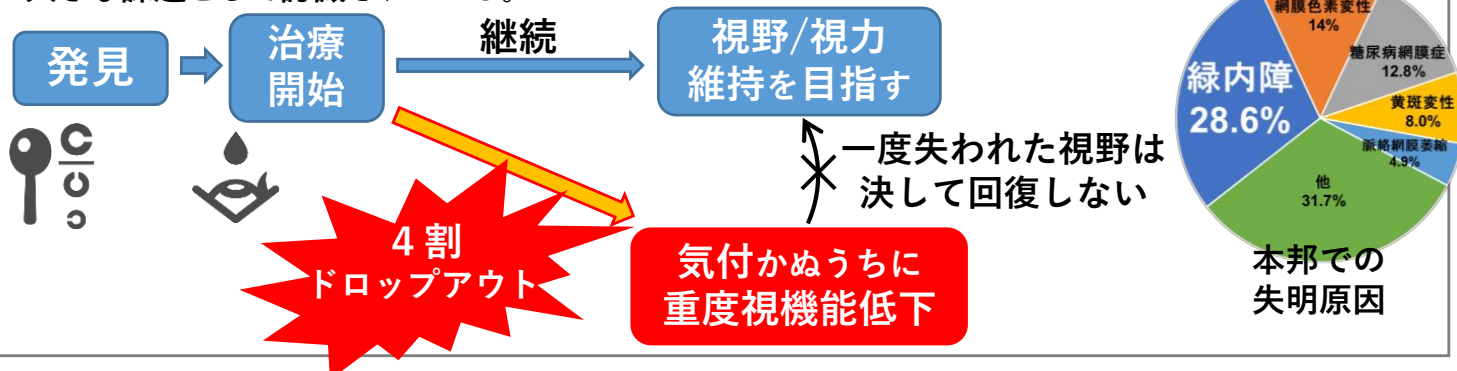
株式会社メディカルプラットフォーム 代表取締役 深田晋平



背景・問題提起

緑内障は日本に限らず**先進国において失明原因の第1位**であり、不可逆な神経障害により生じる為、**早期発見早期治療、そして治療継続が肝要**である。しかし、多くの場合に緑内障発見時には自覚症状が乏しく、また治療の主役たる点眼薬による眼圧下降効果はその効果を実感できるものではないため、**点眼・通院を自己中断する患者が多い**。2021年に日本緑内障学会主導で行われた緑内障診療実態調査アンケートにおいても、

- ①来院がない患者に対して約8割の医師が特に連絡せずそのままであること、
- ②(他疾患と比較し)治療継続してもらうことの理解を患者に得る説明の難易度が高いこと
- ③(他疾患と比較し)毎日点眼してもらうために説明を繰り返し行う必要性が高いことが示され、**大きな課題として認識**されている。

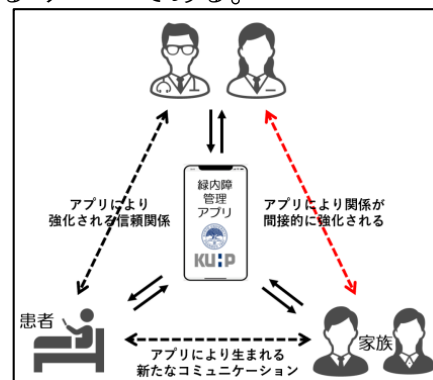
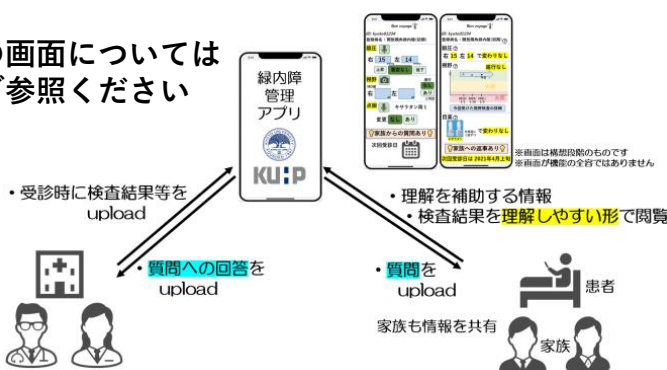


方法/ソリューション

患者・患者家族・医療者の三者間を繋ぐ、Android/iOSアプリを開発中である。概要としては、

- ①臨床指標となる眼圧・視野検査や、点眼薬の状況を**患者自身が記録/把握**するだけでなく、
- ②**家族と共有**することで患者の治療への積極的参加を促す機能を有し、
- ③必要な補足情報・患者にとって有益な情報を提供することができる ツールである。

開発中の画面については次頁をご参照ください



【ポイント】

- (A)単なるPHR(personal health record)ではなく、検査結果を患者にとって理解しやすい形で提供 → 積極的治療参加を促せるだけでなく、**多忙な臨床医の業務効率化・信頼関係構築にも寄与**
- (B)付き添いできない家族とも共有することで、これまでアプローチしづらかった力点へ介入できる → 医療者の言葉は時に患者に受け入れられ難く、**家族(配偶者/息子娘/孫等)からの言葉は心強い**

お問合せ先

所属・氏名：京都大学医学研究科 助教 沼尚吾

メールアドレス：numa1988@kuhp.kyoto-u.ac.jp



メールアドレスのQRコードです
お気軽にご連絡ください



疾患理解を深める Personal Health Record

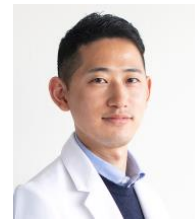
～眼科専門医が緑内障に取り組む

発表者：京都大学医学研究科 助教 沼尚吾

チームメンバー：

医療法人 創夢会 理事長 武蔵国弘

株式会社メディカルプラットフォーム 代表取締役 深田晋平



期待される結果

アプリ導入した患者の疾患理解改善・医師との信頼関係向上により、ドロップアウト率が低下し、それにより視機能予後が改善することが、初期構想における最終的なアウトカムである。

ディスカッション、注目すべき点

【発展性】

緑内障患者は全世界で約7600万人と推計(2020年時点)され、**今後高齢化に伴う増加は必至**と言える。2030年までに**緑内障を対象とした市場規模は全世界で1兆円**を超えると推計されている。

まずは同アプリの有用性を最小限の機能で京都大学眼科を中心とした医療圏で確認した後に、関連大学の医療圏へ拡大、そして日本緑内障学会での発表を経てさらなる拡大を目論んでいる。

また、**緑内障患者への説明・疾患理解に資するツールの拡張・発展**を目論んでいる。例として、

① **「体感ツール」**：未治療の場合にどのような見え方になってしまうか患者が体感するツールや、患者の見え方を家族にも体感してもらうツール(患者の検査結果を元に、実際の風景を加工する)

② **「点眼忘れ予防ツール」**：点眼を忘れずに実施できているか管理する機能であり、家族と連携等を想定している。

また、ここまで説明してきた問題は他国においても同様であり、翻訳すれば他国展開も期待できる。登録患者数が増えれば、生活習慣や社会的パラメータ等、これまで通常診療では収集できなかったデータを得て研究等に活用することも可能であり、発展性は非常に高いと考えている。

【4つの注目すべき点】

- ① 臨床現場で緑内障患者を日々診察している**眼科専門医が発起人**となって開発を進めてきた点
- ② 疾患理解に資する情報を提供することで**医師の負担軽減・現場のタスクシフトに貢献**する点
- ③ PHRという概念を掘り下げ、**家族を巻き込んで**アドヒアランス改善を目指す点
- ④ COVID19流行以降、家族が通院に付添いづらくなった昨今において、付添わなくても患者の現況を把握できるため**ニューノーマルに適したテーマ**である点 等が特徴である。

アプリイメージ



画面レイアウト・仕様は検討中のものなので、実際のものとは異なります

お問合せ先

所属・氏名：京都大学医学研究科 助教 沼尚吾

メールアドレス：numa1988@kuhp.kyoto-u.ac.jp



メールアドレスの
QRコードです
お気軽にご連絡ください

